

あとがき	216
主な参考文献	215
花散里	209
賢木	171
葵	143
花宴	132
紅葉賀	115
末摘花	97
若紫	69
夕顔	40
空蟬	37
帚木	18
桐壺	4

桐 壺 きりつば

限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

今を最後としてお別れしていきます死出の道の悲しいにつけましても、ほんとうにいきたく存じますのは、この死出の道ではなく、命でございませう。(帝とともに生きとうございませう。)

「いづれの御時にか。女御、更衣あまたさぶらひ給ひけるなかにいとやんごとなき際にはあらぬがすぐれて時めき給ふありけり」——源氏物語冒頭の文である。いつの御代か、後宮の数ある女性の中に、帝(桐壺帝)の愛を一身に集めている更衣(平安時代の後宮の女官で、女御の次位)がいた。光源氏の生母、桐壺更衣である。帝の寵愛が深ければ深いほど後宮の嫉妬は増す。右大臣の娘で帝の最初の妻、そして第一皇子の生母でもある弘徽殿女御がその急先鋒であった。心労のため、日ごろから病みがちであった更衣は、源氏三歳の夏、今日か明日かの命となる。更衣を愛するあまり、それまで里下りも一向に許さぬ帝であったが、これ以上引き留めることはできなかつた。宮中では死の穢れを忌むからである。退出しようとする更衣に、帝は、「限りあらむ道も、おくれ先立たじと契らせ給ひけるを、さりとて、打捨ててはえ行きやらじ」と分別を失つて言う。

この歌は、源氏物語中、最初に出てくる歌で、臨終近い更衣の帝への贈歌である。「限り」は、最後、あるいは最期の意味であるが、この歌の場合、下句の「いかまほしきは命なりけり」によって、「限りとて別るる道」が死出の旅路をみつめてのこととなる。「いかまほしき」の「いか」は、「行く」の未然形。中古では「行く」は話し言葉の要素が強く、歌には普通「行く」が用いられたが、ここでは「生く」を掛けたのである。「道」の縁語。更衣は、上句で、やむなく現世に残るいとしい人と、今生の別れが悲しいと嘆き、下句に、本当にいきたいのは死出の道ではなく命でございませう——帝とともに生きとうございませうと、ここをこめて訴えたのである。結句の「なりけり」に深い哀しみがこもる。歌の後に、「息も絶えつつ、聞えまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば」と地の文が続く。息も絶え絶えに、「いかまほしきは命なりけり」と最後の力を振り絞つて帝の愛に応えようとする更衣をみると、帝のころは、さらに乱れる。

5 桐 壺

ところで、本文中に返歌はない。この、帝の返歌がないことを、帝の悲しみの深さとして花鳥余情(一条兼良著)に、「御門の御返事なきにて、御心も心ならずおぼしまどへるはしるべきなり」とある。しかし、初句の「限りとて」は、帝の言葉の「限りあらん道」の「限り」を受けており、帝の「おくれ先立たじと契らせ給ひけるを、さりとて、打捨ててはえ行きやらじ」に対して、やむなく「別るる道」といい、「いかまほしきは命なりけり」と応えているので、贈答の形が、詞と歌になつたとみることが出来る。この上に帝の返歌を重ねるとくどくなり、物語としてはかえって興を殺ごう。更衣の歌をクライマックスとして、あとは余情として残した作者の意図を読みとりたい。